

心理学の法則ってどのくらい確かなものですか？

Q

『これなら成功する恋愛の心理学』という本を読んでいたら、吊り橋効果というのがあると知りました。吊り橋のドキドキ感が恋愛感情に転化するそうで、試してみようと思いき、意中の男性と吊り橋を渡ってきましたが、何も進展がありません。がっかりです。

A

札幌学院大学人文学部教授

森 直久 (もり なおひさ)

ダットンとアロン (1974) の実験のようですが、研究成果は引用の過程で内容が短く要約され、平易化されることが多く、ことに一般読者向けの本ではこの傾向が高いと思われます。応用を考えるなら、研究の詳しい内容を吟味して、研究成果の一般化可能性を検討してみる必要があります。いっしょに検討してみましょう。

ダットンとアロンの実験の要旨は、以下の通りです — 揺れる吊り橋あるいは安全な橋で、女性インタビュアーが待っています。渡ってきた男性 (18 ~ 35 歳) で、協力を承諾した人に、創造的表現に対する風景の印象の効果を調べているからと TAT 図版を見せ、浮かんだことを物語にしてもらいます。その後、もっと実験の説明をしたいからよかったら電話してねと、女性は協力者に氏名と電話番号が記されたメモを渡します。吊り橋条件の 18 人中 9 人、安全な橋条件の 16 人中 2 人が、後で電話をかけてきました。

まず考えたいことは、法則の適用対象の範囲です。対象者の総体を母集団といいます。データを採られた人がここから無作為に抽出されていけば、母集団への一般化が統計的に保証されます。この実験の母集団ってなんでしょうね。男性一般でしょうか。協力者は特定年齢層の男性で、多分カナダ人かアメリカ人の吊り橋に来た観光客で、かつ協力依頼に応えた人でした。男性一般にはほど遠い偏りです。これでは無作為抽出になりませんから一般適用は無理です。

また、どういうデータ (従属変数) で効果を見ているかも気になります。この実験で測ったのは、電話をかけるという行動です。あなたが進展させたかった彼との仲は、そういう行動で

すか。少なくとも彼に期待した行動が、実験の従属変数に反映されていたといえますか。そういえないなら、あなたと彼に実験結果を適用できる可能性は低いです。これは従属変数の妥当性の問題といわれます。

実験効果の大きさへの注意も必要です。電話をかけてきたのは、吊り橋を渡った人の半数のみです。効果があったといっても安全な橋と比較した限りであって、実質的にはその程度です。彼氏はかけなかったほうに属するのかもしれませんが、あ、ちなみにこの実験の目的には「魅力的な女性が、強い恐怖を感じた男性にとって、より魅力的に映るかを確認する」とあります。出会う女性は魅力的だという前提なんですね。も、ものを投げないで下さい。

ともあれ吊り橋実験の成果は、あなたと彼に適用できるものだったのかとも疑問です。今回吟味したことについては、橋 (1986) に詳しく書かれています。心理学研究の適用可能性についてよく勉強して、彼との仲の進展に役立つ法則を見つけられますように。えっ、もう心理学には頼らない？ それは賢明な判断です。

文 献

Dutton, D. G. & Aron, A. P. (1974) Some evidence for heightened sexual attraction under conditions of high anxiety. *Journal of Personality and Social Psychology*, 30, 510-517.

橋敏明 (1986) 『医学・教育学・心理学にみられる統計的検定の誤用と弊害』医療図書出版社



Profile — 森 直久

札幌学院大学人文学部教授。専門は認知心理学、社会心理学。主な著書は、『心理学者、裁判と出会う：供述心理学のフィールド』（共著、北大路書房）など。